

私は本学に赴任して16年間、その前は国内外の留学4年間を含めて製薬企業で21年間、合わせると37年間、薬はどんな病気に効くのか、どのようにして効くのかなどについて研究してきました。幸運にも片頭痛や緑内障の薬などいくつかの新薬を世に出すことができました。昨今、一つの薬を創るのに10年で3千億円かかり、2万5千個の化合物を作って、そのうち一つが新薬になると言われています。薬創りは薬の種を探し、実験動物で効果と安全性を確認して錠剤や顆粒を創り、ヒトで

薬に込められた想い

岐阜薬科大副学長 原英彰



の臨床試験をそれぞれの部門で行います。そのプロセスにはさまざまな法律があり、最終的にはヒトで効果と安全性が認められて新薬になります。

これは各部門に課せられた役割を果たし、次の部門に薬の種というたすきを渡していく駅伝のようです。社会のニーズを把握し、研究戦略を十分に練って到達目標を決め、チームワークと他部署との連携で研究・開発を進めることが大切です。こうして莫大な研究開発費と多くの動物の犠牲の上に創られた薬一錠の中には、研究者の「この薬で元

気になってほしい！」との想いが込められています。薬はヒトの病気を治す力があり、健康をもたらすことから、研究はヒトの健康に貢献できるやりがいのある仕事です。

当大学もこれまで七つの新薬創出に関与してきました。本学の伝統かつ強みの一つである「新薬に結びつける研究力」をモットーに、新薬開発によってヒトの健康に貢献したいと思います。皆さん、現代科学の粋を集めた一錠を大切に、決められた処方に従って正しく飲んで元気になってください！